

風景デザインレター from 九州(第 14 号)

風景デザイン関連の書籍紹介としては本筋に戻して、「エッフェル塔試論」をもとに、押上のTV塔、延岡の紅白煙突などの、突然出現する新たな景観に対して、人間の持つ慣れということをテーマに考えてみました。

松浦寿輝の「エッフェル塔試論」を読みながら

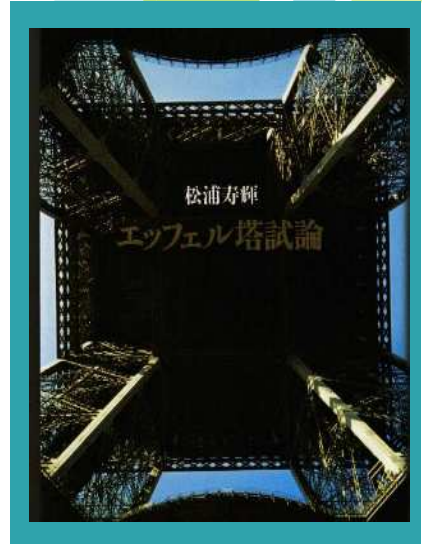
風景に対する「慣れ」というのは何？

「美人はあきるが、ブスはなれる」んんんひどい言葉ですが、ある意味での真実は表現しているように思います（差別用語・放送禁止用語？で、女性の方々すみません）。松浦寿輝の代表作「エッフェル塔試論」を再読してみて、新たにそう思いました。ご存知のように、パリのシンボルエッフェル塔は、1899年のパリ万博の目玉として、東京タワーのように電波塔などの機能を持つことなく、純粋に塔だけの目的でエッフェルの設計で建てられたものです。当時は、喧々諤々の議論があり、パリの景観、石で造られた建築物の完成形であるパリの景観を壊すものとして非難を受けました。そのようななか、万博に訪れた人は、怖いもの見たさも手伝いエッフェル塔に上って鳥瞰的なパリの景色を愉しんだとおもわれます。しかし、ここに面白いデータがあります。エッフェル塔の年間入場者数ですが、万博当時は200万人程度が、その後は、30万人から60万人程度に落ち込んでいます。まあ、100年以上も前ですので、人の移動も限られていたし、観光旅行のような行動も発達していなかったこともあるかもしれませんが、しばらくは、見あきられていたという状況が60年ほど続きます。その後、第2次大戦が終わって以降は、爆発的に入場者は増え、世界的な観光地となるのですが。エッフェル塔がパリのシンボルとなること、パリ＝エッフェル塔の関係が生まれるまで、60年近くかかっている

と言い換えていいのかもしれませんが。あるいは、意識的に、あるいは無意識的に、エッフェル塔の存在が街づくりに影響して、エッフェル塔の存在を条件として街が構成されていき、60年たって、エッフェル塔を中心としたパリの街が出来上がり、その結果に気がついたのが60年後であった。エッフェル塔とパリの街が、お互いに馴染むのに60年かかったということかもしれません。

人間の感覚の防衛反応として、「慣れる」ということがあります。これは当然視覚にも当てはまるものでしょう。最初は見慣れないぎょっとするものも、あっという間に見慣れてくる。冒頭の差別的ことわざ？も、その慣れのことを表しているものです。

ただ、面白いのが、慣れた後、どう見るかという問題がそこに残っており、エッフェル塔の場合は、60年後に外部からの評価も加わり、エッフェル塔自体を再評価する行為を通じて、今のようなパリのシンボル、そしてパリ市民にとってはパリの誇りに思えるようになったということで、逆もあります。当時は、脚光を帯びて登場したものの、あきらめ、そして廃れ、忘れ去られていく。多くの事例は、こちら側のものばかりです。しかし、塔のような視覚的に目立つ存在は、忘れ去られることはなく、良くて意識されなくなる、これは風景に溶け込むということもあるでしょうが、人の意識として見ないように、考えないよう存在を意



識の上から消されるというケースもあるかもしれません。しかし、何らかの原因で、再評価、再注目されると、慣れてしまったという感情がプラスに働き、なかなか捨てたものでないではないかということで、信任を得る。エッフェル塔の1950年以降の評価は、そんな感じではないでしょうか。

現在、現地調査でたびたび訪れている延岡の街には、旭化成の工場があることで赤白の煙突が目立つところ。最初は、ぎょっとし、次第に気にならなくなり、五ヶ瀬川と煙突が織りなす風景を面白く楽しめる視点場が見つかる。この赤白の巨大な煙突も、夕日の3丁目的な昭和の時代を感じさせて、レトロ的でもいいねえ、と思ってしまう。

さて本題ですが、この視覚的に慣れることをどう取り扱うか。景観に対する認識も変わってきていて、例えば、裏方に回っていた存在を表舞台に引っ張り出し、景観をあるがままに素直にみる見方ができるようになっているような気がします。例えば、生産を担っていた工場群やコンビナートが、おしゃれな風景とみなされるようになってきています。これら工場群の風景写真集が話題となったりしていますが、この前見つけた写真

集は、なんと水門を素材として取り上げた風景写真集でした。ここでは、私たちが景観デザイン検討の際に事例写真の提示でやるようなデザインに配慮した事例集というのではなく、何もデザインの意図されていない水門が、レトロ的な扱いで評価されています。「水門おたく」「ジャンクションおたく」のようにまだまだ社会的に認知されているとは言いがいのものはありますが、なんだか、そのような雰囲気が出始めていることも間違いではなさそうな気がします。今後、公共施設に対するデザインの配慮が十分に行きわたると、逆に、景観デザインに配慮される前の公共施設、いわゆる標準設計による公共施設が、レトロ感を感じるよりどころとなるような時が来るのかもしれませんが。

以前、このレターシリーズで、舞台と舞台装置のような区分を行い、舞台装置は本来表に出るべきものではないということを書いてみました。

今は、舞台装置もごちゃごちゃ舞台にでてしまっている街の風景に慣らされて、街の景観デザインの専門家以外の人たちは、特に違和感もなく、それらの風景を受け入れています。電線の地中化が進んでしまった時代が来ると、今度は、電線がごちゃごちゃしてる街裏の風景を懐かしみを持って受け入れる、あるいは、そのような風景を伝建地区のように大切にしたいということも出てくるかもしれません。まあ、これらを「文化的景観」と称して、守ろうという

ことになっているのかもしれませんが。

いい景観、悪い景観というのは、結局何なのでしょう。その時代にあった見慣れた風景というものは、その時代では良い悪いの評価にかかわらず、希少的なものになった時に、「文化的景観」として大切なものとしてラベルが貼られる。従って、「文化的景観」というものは、希少的なものになった時点で、その価値が生まれるという存在ということですか。今、伝建地区に残っている風景も、希少であるからこそ価値があるものなのか。今は、どんなにつまらない風景でも、見慣れているものがなくなることに對しては、寂しい消失感のようなものを持つことになるのか。昔ながらの滑り台・ブランコ・鉄棒のある

かつての児童公園の存在も、街区公園となり、遊具の安全性が過剰に騒がれる中、街から消えつつありますが、これらの「文化的景観」として存在意味を持つようになるのか。

現在、東京の押上で建設中のデジタルタワーは、どのように評価されているのでしょうか。そして塔としてのシンボル性を受け渡す東京タワーの評価は。そして、今後、両方の塔は、どのように評価が変わっていくのでしょうか。

【続く】

